

# 早稲田大学日本語教育学会 2006年 秋季大会 発表要旨

## A会場 201教室

11:00-11:30

NNSガイドの独話におけるポーズと発話速度の操作 名所解説場面を例に

板橋貴子

アンコールワット遺跡の NNS ガイドによる名所解説場面の独話を音声解析ソフトを使用してポーズ・発話速度の観点から分析した。NS50 名の評価によって選出された上位群ガイドと下位群ガイドの比較を通して分析を行ったところ、上位群ガイドは固有名詞の導入、後続の文脈を予告する表現、レリーフを現場指示して説明する際などにポーズ長や発話速度の遅速を操作していることが分かった。本研究ではNSによるガイドの独話の評価調査の結果と照合しながら「分かりやすい」独話とポーズ・速度との関連性を追究する。

11:40-12:10

シンポジウムの討論の談話における待遇方略

寅丸真澄

本研究では、公的な場面における討論の談話の待遇方略を考察する。待遇方略とは、「話し手が行う聞き手への言語的な配慮」である。討論における配慮の中でも、反論等の際に用いる配慮以前に学習者が習得すべき基本的な談話運用力の一つとして、問題解決以上に意見表明そのものを重視するシンポジウムの談話における配慮を取り上げ、発話機能、メタ言語、文体レベルの3つの観点から、「話段」という単位を用いて分析した。分析の結果、シンポジウムの討論の談話では、談話参加者の役割や発話の目的によって認定される話段が重層構造をなして出現すること、そして、それらの話段ごとに発話機能、メタ言語、文体レベルにおける待遇方略が異なることが明らかになった。

14:50-15:20

「メールによる話し合い」における「異見表明」の方法に関する考察

吉川香緒子

話し合いにおいて「異見」を表明する際、「異見表明主体」には、相手に理解され、受け入れられるように自分の主張をすることと、相手に対する配慮を両立するための工夫が必要とされる。共通の目的を持つ複数名がパソコンのメールを介してやりとりする行為は、「文字コミュニケーション」としての話し合いであると考え、実際のメールにおいて「異見表明主体」がどのように「異見」を伝えているかの分析を試みた。その結果、表現形式、メール構成上の工夫と共に、「部分異見化」する、「否定型」を回避するといった工夫が確認できた。

15:30-16:00

日本人ビジネス関係者の待遇コミュニケーションに関する考察

「混合体」の問題を中心に

福島恵美子

「混合体」を「デスマス形」と「非デスマス形」の発話で成り立つ、話段という単位で捉え、ビジネス現場で交わされる会話には「混合体」が必ず現れるのではないかという考えに基づき、調査、分析を行った。まず、ビジネス現場の生の会話を録音し、「場面」(「人間関係」と「場」)と状況が異なる20のデータ、20名分を収集した。次に、それらのデータを文字化し、話段ごとに分析した。その結果、全てのデータに「混合体」が現れ、「丁寧体」や「普通体」だけというデータは見られなかった。つまり、「場面」と状況が異なっても、「混合体」が現れるという結果が得られた。さらに「混合体」が現れる要因も明らかになった。

16:10-16:40

意見文に見られる説得ストラテジー 母語作文と第二言語作文の比較を通して

松浦とも子

本研究では、同一の中国人学習者が母語で書いた意見文と、日本語で書いた意見文の比較を通して、学習者が本来持っているはずの文章産出能力と第二言語でのそれとの相違を分析した。統括性の比較結果及び、中国語作文での説得ストラテジー、「引用」に見られる修辭的特徴、「テーマを語る観点」の特徴などから、母語で書く文章は、すでに母語による方略スキーマと事実・概念スキーマに基づく説得ストラテジーを持っているため、「内容的問題空間」と「修辭的問題空間」との相互作用が起こり易いことを確認した。

## B会場 203教室

11:00-11:30

日本語教育における協働とは何か - テーマの共有化をてがかりに -

市嶋典子

従来の日本語教育においては、一般性・普遍性の高い情報や表現形式を抽出し、それを共通の知識として学習者に与え、共有、学習させてきた。本研究ではこのように固定的・普遍的な「共通知」を一方向的に学習者に共有させるありかたを批判的に捉えたうえで、具体的な日本語教育実践の分析を通して、教室の中で他者と共に作り上げる動的な「共有知」を創出することが協働的日本語教育実践に必要であるということを主張し、日本語教育における協働のありかたを再考した。

11:40-12:10

「形式」への依存から表現することの自律へ

総合活動型日本語クラスにおける学習者の意識変容に関する一考察

陸麗青

本発表は総合活動型日本語教育の実践クラスの中で、学習者の意識変容及びそれが表現活動にもたらした変化について、授業データ、インタビュー、作成レポートを通して質的に分析した。その結果、総合活動型日本語クラスにおいて、学習者が「形式」への依存意識から脱却する可能性があることが分かった。本研究の調査対象者は「形式」への依存意識から脱却し、「表現すること」に関心がシフトしたというふうに意識が変容した。その意識変容が彼の表現活動にもたらした変化は「自分で表現方法を工夫し、ことばを創出する」、「自己評価・修正」と分析し、それは「表現すること」の自律の獲得と捉えた。

14:50-15:20

日本語教育における「正しい日本語観」を問う 学習者の語る「日本語人生」から

鄭京姫

本研究におけるインタビュー調査を通して、コミュニケーション能力の育成という名の下で栽培されてきた、誰もが信じきっていた日本語教育における「正しい日本語観」、さらに、それに支えられた日本語教育の歪んだ構造の問題が、学習者の「日本語人生」の中から浮き彫りになった。何故ならば、学習者の語りは生の「声」であり、日本語教育、日本社会をいま生きている、彼らからの「メッセージ」であるからだ。

なお、今までも、「正しい日本語」に対する問題を取り上げ、指摘はしていたが、結局、日本語教育学、日本語教師側の視点に留まり、それが実際に学習者にどのように影響を与えているのかは、さまざまな面から殆ど明らかにされていなく、なおかつ、今までの研究ではその点が欠けていたが、本研究はその面において、大変意義があると思う。

15:30-16:00

アイデンティティを捉えなおす 国際教養学部日本語上級クラス実践報告

小田晶子・三代純平・森元桂子

インターナショナルスクール出身者や、いわゆる「帰国生」など多様な背景をもつ学習者が集まる早稲田大学国際教養学部日本語上級クラスにおいて、アイデンティティの捉えなおしの場合としての教室設計をし、実践した活動の意義と課題を報告する。本発表におけるアイデンティティとは、国籍、民族などの所属に留まらず、自己をどのように考えるか、どのようになりたいかという広い意味での捉え方を指す。教室を自己の考えを表現する場とし、議論を通して、学習者が自己を捉えなおす中で、自己へのより深い理解や自信を生み出していったことの重要性を示す。